

日本の文学

80

名 作 集(四)

中央公論社

日本の文学 80

©1970

名 作 集 (四)

昭和45年10月5日初版発行
昭和49年2月15日5版発行

発行者 高 梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 株式会社トープロ
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 文京紙器株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

肉体の門	田村泰次郎	7
夏の花	原 民喜	32
夕 鶴	木下 順二	46
野 狐	田中英光	64
冥府山水図	三浦 朱門	84
鶴	長谷川四郎	96
獵師と兎と賭と	きだ みのる	121
伊豆の街道	川崎長太郎	134
アメリカン・スクール	小島 信夫	167

女中ッ子	由起しげ子	195
檀山節考	深沢七郎	219
犬の血	藤枝静男	255
夜の客	今東光	289
ガダルカナル戦詩集	井上光晴	307
谿間にて	北杜夫	344
蠍たち	倉橋由美子	374
わたしの畢山	杉浦明平	406
童話	なだいなだ	431
注解		477

年 解
譜 説

挿 口
画 絵

秋 山
駿

「谿間にて」

山 口 長 男

「肉体の門」「野狐」「鶴」

「伊豆の街道」「犬の血」

大 沢 昌 助

「夏の花」「檀山節考」「谿
間にて」「蠅たち」

山 口 長 男

「夕鶴」「アメリカン・ス
クール」「ガダルカナ
戦詩集」「童話」

脇 田
和

名
作
集
(四)

肉体の門

田村泰次郎

小政のせんと自分で名乗る浅田せんは、裸になると、まだ乳房も十分にもりあがつてはいない。十九歳にしては皮膚に艶がなく、筋肉に脂肪の乗りがうすかった。身体の青白さは、すこし病的のようだった。

せんは一日置きに朝のあいだ、矢の倉の刺青師彫留のもとへかよっている。まだ四十に間はあるが彫留は、戦前からやくざのあいだではかなり知られた彫師で、戦時中旋盤をあつかわれていた徴用婦りの腕にも変りなく、針の目の綺麗さと、仕上げの派手さで、いま売りだした。浅草のある親分のおもい者で、もと柳橋に出ていた女の背に彫った、彫留の牡丹は蝶が来てとまるといわれ、水もしたたるとまでの噂のある、終戦後彫物界第一等の傑作といわれている。

「親方の牡丹は、屋根熊さん以上だと、年寄り連中はいってまずぜ」客が愛想をいうと、「なあに、あつしのはいたずらでさあ」と、口ではへりくだったが、屋根熊の純爛さはもちろん、彫友、彫金、宇之などといったかつての名手たちの手法までひそかにとり入れていることは、まちがいになかった。そんなように芸の上ではひたむきなところがあつたが、いわゆる名人肌といった気むずかしさがなく、客当りはごく気さくなために、家には客がたてこんでいる。横浜や、水戸からかよってくるのもあつた。

焼け跡に建った六畳に四畳半のバラックである。四畳半を仕事場に、六畳は客の控えの部屋にあてていたが、六畳間は朝から晩まで客でいっぱいなので、彫留のかみさんは、赤ん坊を抱きながら、お茶の接待に追われきりである。客は博奕打ちやテキ屋ばかりでなく、復員の闇屋からチンピラまでいた。せんのようなしよ、ばい娘もいた。一体に、玄人と素人との区別が、今日の世間でもあいまいなように、ここでもそうだった。主人が客に小言をいわないのいいことに、闇屋やチンピラたちは、勝手なことをしゃべり散らしている。ガソリンをいくらかで買って、いくらかで売りとばしたとか、いかさまズルチンでいくらか儲けたとか、そうかと思うと、チンピラたちは、「かつ（恐喝）でまきあげるにやまんじゅう（時計）

が、てっとり早えが、足がつくのも早えからな」なんて
いって威張っている。博奕打ちやテキ屋はどっちかとい
うと無口だった。今の世間の例にもれず、ここでも素人
が玄人を圧倒していた。彫るのは、一日一寸角の大きさ
ときまっていたが、客が多いので下働きが二名いる。ど
の客もよく金を都合して、根気よくかよっている。きち
んときまっていたのが、急に顔を見せなくなると、さ
かがあった。検査されるか、身体があぶなくなつてずら
かるかするのにちがいない。

「関東小政」と、一字二寸角の勘亭流で、せんは左の上
脚に彫ってもらっていた。一字三百円で、すでに三十日
あまりかよい、まだ「政」の字だけが筋彫りのまま残つ
ている。彫りあげると、千二百円をつぎこんだことにな
るのだった。街のしょうばい娘であるせんにとって、千
二百円は安い金額ではない。ただせんはなにがなんでも
自分の肌を刺青がして見たいのだ。身体を売っても、ま
るつきり肉体のよろこびをまだ感じない彼女は、すこし
早くひらき過ぎた花が匂いのうすいように、身体も精神
も、どつかまともでないかもしれない。せんは人間の皮
膚に、さまざまな絵や字が刻まれることが珍らしいのだ。
そういえば、彫留へ来る男たちは、みんなそうなのにな
がない。ちょうど、原始人が、自分の身体を刺青で飾
るように、それが知能の低い子供のような単純なよろこ

びだった。それとともにまた、原始人が虎や、豹や、熊
と闘うには、人間以上の能力をそなえたなにかに化
けなければならぬのと同じように、せんのその日その
日が闘いである生き方には、自分よりもっと強い、逞
ましい神秘な力を本能的に欲しがった。自分たちの縄張
りを荒らす、山の手あたりのお嬢さん面したパンパン娘
を、路地にひきずりこんで、ばつと左の腕をまくりあげ、
「関東小政」の四字が月の光か、ネオンのあかりに映え
るのを眼にしたときの、相手の毒気を抜かれた表情を想
像すると、闘志で胸もとがうずくのだ。

「お前さん、お見それでないよ、あたしゃこういうもの
さ」と、凄味を利かせてやんわりと出るか、それとも、
「見損うねえ、へん、あっちにもこっちにもあるお嬢え
さんと、お嬢えさんがちがうんだよ」そう頭からかむせ
てやろうか——三つ束ねの墨を含んだ絹針が、ぶつ、ぶ
つと皮膚を噛む痛さを、歯を喰いしばってたえながら、
ひそかに口のなかでつぶやいていると、いつか痛さも忘
れてたのしくなるのである。「ちえっ、強情なあ、まだな
あ」襦をへだてて、しんとした気配に、チンピラどもは
眼を見あわせて舌打ちをする。

小政のせんはまるで少年のような筋肉だけの肉体を持
っているが、その魂はまた、氣に入らぬものには、なん
でも噛みつきこうとする気魄にあふれている。せんにはど

んな怖^こいものもない。いや、せんだけでなく、彼女の仲間
間は、二十三歳の菊間町子をのぞけば、ボルネオ・マヤ
こと菅マヤでも、ふうてんお六こと安井花江でも、ジ
プのお美乃こと乾美乃でも、みんな人間の少女というよ
りも、獣^{けもの}めいている。それも山猫か、豹のような小柄で、
すばしっこい猛獣である。そういう猛獣たちが獲物を狙
って、夜のジャングルをさまようのとかわからない、必死
な生存欲に憑^よかれて、彼女たちは宵闇^{よぐら}の街をうろつくの
だ。背広のサラリイマンであろうと、復員服の闇屋であ
ろうと、闇肥りの年輩者の工場主であろうと、みんなこ
の猛獣たちの獲物である。

彼女たちのしようばいは、女衒^{めづ}や桂庵^{けいあん}みたいな、あい
だにはいって儲ける手合いがない。街の都指定の鮮魚
直売所には新聞紙に下手な字で、「生産場と消費者との
直結」とうたってあるが、彼女たちのしようばいのやり
方こそ、それにあたる。自分で客を見つけ、自分を売る。
これ以上の合理的な直売法は、どんなやり手の商人でも
考えだしたことはない。銀河や星のきらめいている夜空
の下で、あるいは蒸し暑い雨雲の垂れこめた下で、焼け
ビルのなか、立ちかけのマフケットのなかで、埋め残さ
れたじめじめした防空壕^{ぼうくうごう}のなかで、彼女たちは雑作もな
く、仰向^{ようきやう}いてたおれる。そうして、野天の取引はおこな
われる。客の眼は、彼女たちの瞳^{ひとま}が意外に綺麗に澄んで

いるのを見て、とまどうときがある。まだ情欲の神秘を
知らぬ彼女たちは、まったく生きんがための必死なしよ
うばい、にだけ打ちこんでいるのだ。客はちよっとひるむ。
彼女たちには、なぜ客がびくつくのかわからない。彼女
たちは不安がり、客の眼がもとの好奇の光をとり戻すま
で、じっと客を抱いて放さない。それが彼女たちの闘い、
——生きんがための闘いだ。

法律も、世間のひとのいう道徳もない。そんなものは、
日本がまだ負けないとき、彼女たちが軍需工場のなかで
汗と機械油にまみれているときを最後に、爆弾と一緒に、
——そして彼女たちの家や肉親と一緒に、どっかへふっ
とんでしまった。なんにもなくなつて、彼女たちは獣に
かえつたのだ。まったく、彼女たちは魔都の獣である。

彼女たちは地下の洞窟^{どうくつ}で眠り、喰らい、野天でまじわる。
そのまだ青い巴旦杏^{はだんき}のような肉体は、なにものをも恐れ
ない。むごたらしく、強い闘いの意欲だけがあふれてい
る。爆弾で粉碎され、焼きはらわれた都会は、夜になる
と、原始^{げんし}に還る。彼女たちの血に飢えた、凄惨^{せいさん}な狩りが
はじまる。狩りは旺盛な意欲をもって、機敏^{きびん}におこなわ
れる。ある夜は、逆に彼女たちが狩られることがある。

省線電車の駅で、高架線の下で、十字路で、彼女たちを
つかまえようとする縄が幾重にも張りめぐらされる。だ
らしがなくて、ぼんくらな有閑娘^{ゆうかんねう}たちが、それにひっか

かつて、泣きべそをかいているあいだに、彼女たちはすばしっこく巢にひきあげて、笑いあうのだ。

けれども、彼女たちにも掟がある。それは自由を確保するための掟である。原始人のタブウのような、あるいは獣の世界にある「群」の意識のような、自衛と、生存のための連帯の秩序である。たとえば、彼女たちの縄張りである有楽町から勝鬃橋までの区域で、知らない娘が男をひっぱっているのを見つければ、協同でそういう外部の敵に襲いかかる。そういうときのためや、彼女たちがさつ（警察）にあげられたときに、亭主とか兄貴だとかになつて貰いさげに來てくれる男の仲間がいた。けれども、そんな若者たちは、決して彼女たちのいゝでもなんでもない。ただの生活協同者にすぎない。外部に対してはそういう掟のようなものがあるが、仲間同士のあいだでも、「群」の掟がある。たとえば、正当な代価をもらわずに、自分の肉体を相手にあたえる者が一人でもあれば、それは自分たちの協同生活体の破壊者である。なぜなら、そんな行為は自分たちのしゅうばいを脅やかすことになるからだ。そんな者に対する制裁は、惨酷で、仮借なくおこなわれる。三箇月も彼女たちの仲間だった一人の娘は、有楽町の高架線の下で宝籤を売っていた学生と恋に落ち、「群」の掟を破ったがために、兵隊のように頭を丸刈りにされて、仲間から追いだされた。

腐った泥の匂いのする掘割にのぞんだ焼けビルの地下室が、彼女たちの巢だった。こんな地下の洞窟のような場所に、彼女たちが棲んでいるとは、誰も、——そとで組んで仕事をする男たちも知らない。恐らく、ビルの持主さえ知らないにちがいない。浮浪児と、ルンペンとが、ときどき何かいい貰いものでもあるかと覗きに來た。彼女たちはそれを見ると、噛みつくようになりたてて、追っぱらった。ここは客をつれこんでくるところではない。ここは彼女たちだけの安息所だ。闘いに疲れた獣の眠り、食う場所だ。

洞窟の入口には断ち切れた水道管が、蛇のように鎌首をもたげていて、そこから朝も晩も水が噴きあげている。水はコンクリの傾斜のうえを流れて、掘割にそそいでいる。この水で、米をときぎ、パターの二ポンド入り空罐を飯盒がわりに、飯を炊くと、素敵滅法界な銀しゃりが炊ける。

壁の崩れた箇所のすぐ前を、糞尿船や、砂利船がとおった。近くの岸に平べったい船がとまり、よくしなう板を船と岸とのあいだにかけ、焼け跡からこわれた煉瓦や鉄屑をいっぱい積んでいることもある。朝まだ暗いうちに、しこたま荷を積んでいるらしく、この掘割へ吃水深く、ひっそりとはいつて來る船がある。

「小父さん、ここはお閑所よ。ただとはいわないから、

安くして、すこし置いてきなよ。なんだったら、身体とつかえてもいいわ」

米の闇船をからかうのだ。木更津あたりから夜出てくる船である。

ビルの岸に、半分水びたしになった、ほとんどもう沈みかかっている小蒸気船があった。蒸し暑くて、寝苦しい夜は、しごとから帰った彼女たちは、水垢の匂う船室に寝そべり、ペンキの剝げた舷に腰かけて、「長崎物語」や「婦系図」を歌う。銀河が水面にうつって、さざ波にゆれるのを眺めて歌う彼女たちの頭には、いまし方すましてきた男たちとの抱擁なんか、遠い世界の出来事としか思えない。

「あたいの母さんは、弟と河の中で死んだのよ。代地河岸でさ。弟って七つだもの、逃げられないわ」小政のせいは、そんなとき生々しく自分の運命を思いだす。せんの家は本所横網町で、駄菓子売っていた。母親と弟は橋を渡って、柳橋まで逃げたのだった。

「あんたは、そんなとき、どうしていたの」と、ジープの美乃が訊ねた。

「あたいは、大崎の工場にいたので助かったんだよ。大川へ飛び込んだり、船に乗ったひとたち、みんな死んだわ。舷につかまっついて、死んでいたお角力さんもいたってよ。水の上に出ている手首だけが真黒に焦げたって。

水が燃える、——呼吸が出来ないのよ」「もう、そんな話はよしなよ」とボルネオ・マヤがいった。「あたいたちは、みんな戦争でやられた仲間になっちゃったじゃないの」マヤはボルネオへ行ったことはない。マヤの兄がボルネオで戦死したのだ。それ以来彼女はボルネオのことばかり話すので、こんな名前がついた。眼が大きく、小肥りで、色が浅黒いことも、この名前をひきたてた。けれども、ふだんは誰も、あんまりお互いの過去をいいあわない。そんな感傷をわけあっている気持のゆとりがないのだ。まず食わねばならないのである。そのためには、まず呪うことだと思っている。なんでもかんでも、自分たち以外のものは、みんな呪うのだ。浮浪児も、ルンペンも、赤ん坊も、労働者も、人妻も、みんな呪うのだ。親も、もっと偉いひとも呪うのだ。ビルも、電車も、トラックも、みんな呪うのだ。誰も自分たちをかばってはくれないことをはつきりさせ、自分の気持にくぎりをつけるのだ。そうすると、自分たちだけが力となり、たすけあわねばならぬことがわかる。そして、猛然と闘争心が身内にわきおこるのだ。そこで、団結は一層強められる。その団結は誰が強いものでもなく、誰が教えるものでもない。どうしても生きて行こうとする本能が、ひとりでにそうさせるのだ。

街にはお嬢さんくさいあいまい娘たちが、大勢いる。

そんな娘たちの組もあるだろう。けれども、そんな娘たちの仲間は、ただ肉体の興味だけで、だらしくひきずられている。はつきりとした徒党というのではない。その日その日の吹く風につれて、舗道にこぼれあつまっては、また散ってゆく柳の葉っぱのように、顔をあわせて、一緒に遊んでは、つぎの日はまた知らぬ顔の、そんなものとはちがっている。マヤたちのはあきらかに一つの組である。一つの党である。戦火が、ひとりでに廃都の焼け跡に生んだ自然発生の党である。何党というのだろうか。名前も、七面倒な綱領もないが、飢えと孤独にさいなまれた娘たちだけの、土から生えた根強い団結と、闘争力とを持っている秘密の党である。

「たまげたね、浅草の芸者で、太腿に蜘蛛を彫ってるのがあるそうよ。白粉彫りでさ。酒を飲んだり、いきむと白い蜘蛛が浮きあがるのだって、——魔除けになるんだってさ」彫留の家で聞いて来た噂を、せんが披露した。

「いやらしいったら、ありゃしない」彼女たちは肌の手入れもしないし、幾日も風呂へ行かない。闇市で買った一瓶八円のいんちき香水を、思い出したように胸にふりかける。白粉のまだらに剝げ残った顔に、またパフをばたく。髪は酸っぱい汗の匂いがした。それらが体臭とまじって、彼女たちの身体からは動物園の獣の檻の前へ行くとする、あの獣特有の青くさい、小便くさい、生活的

な匂いが発散する。彼女たちがいつも肌身から離さない身体にくらべて大きすぎる買いの袋や、手下げ籠のなかには、赤いセルロイドの石鹼箱がはいっているが、なかはべとべとに濡れて、乾くときがない。肉体の取引がすむと、彼女たちはごしごしと、部分だけを偏執狂のようにに熱心に洗った。妊娠と、病気にかかるのを怖れる、これは自衛の本能からだった。

人妻のよく手入れた肌や、お体裁ぶったつましさをを見ると、へどが出そうに憎悪した。なんともいえない不潔感で、胸がわるくなる。不倶戴天の仇敵のように、唾でも吐きかねない。菊間町子を、仲間にはいつてきたときから、彼女たちが毛嫌いするのは、そのためだった。町子だけが二十三歳の人妻である。硫黄島で良人をつた未亡人だというのが、二月前から彼女たちの仲間にはいつていた。土橋のところでは客をひっぱっている現場を、小政のせんがみつけて、おどかすと、しまいには泣きだして境遇を訴えるので、つれてかえったのだ。ところが、いまでは町子の人妻らしい女臭さが、彼女たちの憎しみの的になっていた。彼女たちには町子の襟の抜き加減から内輪の歩き方まで、疳にさわるのだ。

「お町さんたら、へんだよ、このごろ、——ちっとも寄りつかないし、たまに帰ってくると、いやにそわそわと尻が落ちつかないじゃないか。男でも出来たんじゃない

の」小政のせんが町子の挙動に敏感になつてゐる。「ねえ、マヤ、あんた、そう思わない？ たしかに普通じゃないよ、いんばいならいんばいでいいじゃないか。なにさ、あの澄ました顔つきは」彼女たちは世間がなんと見ようと、こわいものはなかったが、町子には世間の眼が氣になった。中味はいんばいであろうと、よそ眼には素人の奥さんに見られたのであつた。うわべだけとりつくろおうとするそんな分別が、彼女たちにはなにかいまいしく、不純に思えるのだ。

蒸し暑い夜で、じつとしていても、額や、胸に汗の玉が湧いた。町子は例によつてまだ帰らなかつた。マヤたちは、岸に涼んでゐた。今日は、せんの刺青が仕あがつたので、彼女は心が浮き浮きしてゐた。濡れタオルを左腕にまいて、針痕のはれをひやしてゐた。「あしたからは、小政の姐御^{あねさま}つて、山の手のお嬢さんたちにお辞儀をさせてやるから」刺青をそつと右手でいたわるように押えるとせんは、全身に闘志がみなぎるのを感じた。突然、足音がして、ひとのはいつてくる氣配がした。一足一足が用心深い歩き方をしていた。「誰？」とせんが呼んだ。人影は彼女たちのうしろに立つてゐるのであるが、返辭をしないのだ。「誰なのさ、一体。警察のひとつやあない？」「お前たちはなんだ。ここはなにするとこだい」「ここは、あたいたちのおかん場^{おかんば}よ。警察のひとつなの」

すると、「ふうん」と、ひとりでうなずき、その男は寄つてきて、彼女たちのあいだに割りこんだ。暗いなかで、よくはわからないが、まだ二十四、五の若者だった。すこし、びっこをひいてゐるのを、せんが眼ざとくみつけて、とがめた。「うん、いまお巡りに追われて、一発喰らつたんだよ。擦過傷さ、たいしたことないよ。ちょっと、やすませてもらうぜ。お巡りがきたら、うまくいってくれよ」「ここはこないよ、誰も」

男は安心したようにしばらくじつとして、彼女たちのなかに腰を降してゐた。「畜生、ちくちくしやがる」と、傷の痛みにうめいた。「――誰か焼酎^{しょうちゅう}買つてきてくれねえかなあ、表の屋台で。どんなのだって、かまわねえ」「あたいが買つてきたげる」マヤが立ちあがると、男はズボンのポケットから革の財布をとりだしてわたした。マヤはビール瓶を持って出て行つた。マヤが出かけると、夜の夕立がきた。水面は夜目にも白いしぶきをあげた。せんたちは、男をさそつて、奥にはいった。蠟燭^{ろうそく}をつけると、待ちかまえてゐたように彼女たちは男の顔を見た。肉の締まった精悍^{せいぱん}な顔が、さつきから暗いなかで勝手に想像してゐたのと、寸分もちがわぬのに、みんなはかえつてとまどつた。そのくせ、なぜか、ああ、よかったという氣がした。雨がやんで、マヤが帰つてきた。「あんたは、運がいいわよ。地面に落ちた血が、い

まの雨で流れたといつて、表でお巡りたちが騒いでるわ」彼女たちはこの男の悪運の強さに、なにか神秘なもののさを感じた。男はさっきからあんまり口をきかなかつたが、眼だけは機敏に動かしていた。そんなしぐさにも、この男の旺盛で、すばしっこい自衛本能のひらめきを感じとつて、みんなの眼は小気味よげに、飽かずに彼をみつめていた。

こうして、伊吹新太郎は、自分のあいだ、このうす暗い地下室で、彼女たちと起居をとにもすることになった。拳銃の弾丸傷は、かすり傷ではあるが、右の腿の肉を鋭利なナイフかなにかでざくりとえぐりつつたようになつていた。けれども、大陸の戦場で、胸に一回と、右上膊に一回貫通銃創を受けている彼には、そんな傷など屁でもなかった。二十日もじつと寝ていれば、ひとりでに肉がもりあがつてきて、ほとんどよくなるにちがいない。前線の患者収容所の土壁の家の土間に、じつと動かずに寝ていたことの経験によつて、彼はある期間そうしていさえすれば、人間の身体は自然に治癒するものであることを信じて疑わない。この経験が、自分の肉体のねばり強さについての自信を、ほとんど彼の信念のようにさせている。経験からきた信念というものは、なまやさしいものではない。伊吹には、自分の肉体のなかに存在する逞ましい生命力が、はつきりと自覚出来た。彼には絶望

がなかった。絶えず、自分の内部から発する生命の息吹きのままに、衝動のままに生きていた。こんな明るくて、楽天的な男はめずらしい。マヤたちは、伊吹のしよばい（強盗）だろ（強盗）というし、花江たちはのび（しのびこみ）にきまつているといった。最近流行っているはいぐる（自転車窃盗）だろ（強盗）という者がある。あるとき、遠慮のないせんがそれを訊ねると、「なんでもやるさ、臨機応変だよ」と笑つた。笑うとえくぼがあらわれて、子供っぽい顔になつた。マヤには伊吹が、強盗であるように思われた。——というよりも、強盗であつてはしかなかった。伊吹の肉の締まつて、俊敏な身体つきが、闇成金や有閑夫人をおどかす場面を考えると、なんとなく溜飲（りゅうこん）がさがるような気がした。生きるということを目的にあつまつている彼女たちのような仲間では、その生きるための闘争力をありあまるほど備えている伊吹新太郎のような男は、なんとなく頼りになるような存在だった。みんなは畏敬（けい）の眼で、彼を眺めた。原始人の社会とすこしもちがいがなかった。一番強い者がそこでは酋長（じゆうちやう）になるように、彼女たちのなかでは、伊吹がいつのまにか、中心の位置に置かれかかつていた。

伊吹は毎日、洞窟のなかで、退屈していた。傷の癒り（なを）方まで、獣のように快調だった。まだ歩くと痛んだが、